



Title	解師伐哀図について
Author(s)	高松, 良幸
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1992, 26, p. 21-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48207
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

解師伐袁図について

高 松 良 幸

はじめに

猿蟹合戦は、古くから知られた昔噺であり、殊に江戸時代には、各種の版本が出版され、人口に膾炙するようになった。⁽¹⁾

江戸時代後期、大坂の学問所として町人の儒学教育に多大の功績を遺した懷徳堂に伝来した「解師伐袁図」⁽²⁾（大阪大学附属図書館懷徳堂文庫、図1・2、以下履軒本と称す）は、この猿蟹合戦を主題とする作品である。しかし、日本の昔噺である猿蟹合戦を扱うにもかかわらず、蟹や従者たちは、中国風の軍装に描くという異色の作品である。画面上部には別紙を継ぎ足し、中井履軒が漢文で長文の賛を著している。また、画は無落款であるが、添状は「画は岩崎象外の作」としている。

中井履軒⁽³⁾は、懷徳堂の四代目学主としてその隆盛期を支えた中井竹山の弟で、兄と並んで江戸後期大坂を代表する儒者であった。竹山の生前は、懷徳堂とは一線を置き、經学研究中心の生活を送ったが、兄の没後、懷徳堂の教

育にも関わった。

一方、岩崎象外は、寛政二年（一七九〇）版『浪華郷友録』に紹介されていることから、当時の大坂における有力な画人であったと推測されている。また、履軒と親しい関係にあったことなど、その伝歴の一端も知られている。しかし、彼の画業については、これまでほとんど検証されていない。

本稿では、この履軒本の成立、解師伐袁図の流布の状況について考察する。また、岩崎象外の伝歴および画風について検討する。そして、これらの考察を通じて、解師伐袁図が、懷徳堂の活動の中で、いかなる意味を有するか考えてゆきたい。

一 履軒本「解師伐袁図」

まず、履軒本の賛文（以下これと同文のものを「解師伐袁図賛」と称す）を紹介する。

經四十有七年春王六月丁戌大雨雪夏七月解師伐袁甲亥入袁獲袁侯戊丑用袁侯于解山秋十月（白文方印「華胥國王之爾」）（朱文方連印「蝶」）「戲」）（白文方印「南柯守印」）

傳四十七年六月大雨雪書不時也七月解伐袁獲袁侯復讐也初解子未生也其母適野見袁侯在樹上食柿也從而請一顥袁侯怒擇未熟者而投之中龜而卒解子胎方盈自闕出匍匐橫行而歸長而好勇善擊劔恆弩目戟手而罵曰袁侯親讐也我必復之每罵未嘗噴沫也歲時黍以為糧是歲大雪無柿栗袁大饑於是與師麻石遇諸塗問將何之解子曰伐袁復讐也所齋者何曰黍團為天下最麻石請從許之牛異刀前金威栗子亦至謂之如初皆從焉壬酉圍袁金威与栗子宵孔壁而

入金威匿于衾中刺袁侯栗子爆其爐袁侯一夕三遷丙子解子親以師門焉牛異伏于門側麻石刀前先登袁侯懼欲奔方出門遇牛異而滾焉麻石下而壓之刀前挾也去其指解子揮劔之擊剉之遂滅袁族戊戌用袁侯以祭其母也

この贊文について履軒本の添状は、猿蟹合戦を『春秋左氏伝』の文体に倣って著したものとされている。贊文は、「經」から始まるところと、「傳」から始まるところの二部分から成っているが、前者は『春秋』の本文、後者は『左氏伝』の注釈に当たる部分と判断できる。「四十有七年春、王ノ六月」と年月を記すことや、干支で日を表すことも『春秋左氏伝』と共通する。この贊文が『春秋左氏伝』の文体に倣っていることは明らかである。

内容は、柿の木に登っていた袁侯（猿）は、柿の実を乞うた母蟹に青柿を投げつけて殺した。その胎内から生まれ出た解子（蟹）は、麻石（臼）、牛異（牛糞）、刀前（鋏）、金威（鍼）、栗子（粟）に黍団子を与えて従者とし、袁侯を討伐して仇討ちを果たすというもので、猿蟹合戦の大筋に従ったものである。ただ、袁侯討伐の契機を六月大雪という異常気象による飢饉とするなど、ストーリーの展開に、合理的な理由を与えている。

さて、この「解師伐袁図贊」はいつごろ著されたものであろうか。中井履軒がその居所を「華胥国」と号し、自らを「華胥国王」と称したのは、安永九年（一七八〇）であるとされている。「華胥国王之爾」印が捺されている履軒本の贊文は、当然これ以降に執筆されたものであることがわかる。そして、次項で示すように、この履軒本を模写した作品が散見されることから、これが「解師伐袁図贊」の最も根本的なものとして扱われていたことがわかる。一方、京で活躍した儒者で、南画家としても著名な皆川淇園筆の「猿島復讐図」⁴には、図中に「解師伐袁図贊」が記されており、その末尾には「天明七年（一七八七）丁未夏五月五日」の年紀が見られることから、すでに

この時点でこの賛文が成立していたことがわかる。仮に、履軒本が淇園本に先行して制作されたとするならば、「解師伐袁図賛」の成立は、この間ということになる。ただ、淇園本が履軒本に先行して制作された可能性も存在することから、ここでは、天明七年以前と判断しておくに止めたい。⁽⁵⁾

中井履軒は、歴大な著作を残しているが、その大半は、経学研究、政治、経済、歴史などの思想に関する真摯なものや、漢学者の素養として重んじられた漢詩文などである。猿蟹合戦という通俗的な主題を扱った「解師伐袁図賛」は、戯文と称すべきもので、彼の著作の中では異例に属する。履軒は、何故このような著述をおこなったのであろうか。

もちろん、長年の経学研究の結果、「春秋左氏伝」の文体に馴れ親しんだ履軒が、一種の文章遊びとして著したものであることは確かであろう。ただ、戯文であるとはいえ、そこには履軒自身の主張や思想が盛り込まれているのではないだろうか。

猿蟹合戦の主題は、いうまでもなく仇討ちである。江戸時代においては、主人の仇を討つことは忠、親の仇を討つことは孝に通じる徳行とされていた。猿蟹合戦が江戸時代にもはやされたのは、このような思想的背景があったためと想像することは難くない。

履軒は、その詩文集の一つである『幣帚統編』⁽⁶⁾に収められている「復讐議」で、冒頭に「復讐古今通義。元無容疑也」と述べ、以下和漢の様々な事例をあげ、復讐が認められない場合の法制上の矛盾を指摘している。履軒は、仇討ちを肯定する立場をとっているのである。「解師伐袁図賛」は、戯作として著されたというだけでなく、履軒の仇討ちを肯定する考えに根ざしたものであると思われる。

また、履軒が「解師伐袁図賛」を著した背景を考える上で、教育者としての彼の立場も考慮する必要があるのではなからうか。当時履軒は、懷徳堂の教育に直接参画していなかったとはいえ、兄竹山をはじめ懷徳堂関係者との交流は盛んで、懷徳堂を側面から支えていた。また、自らも小規模ながら学塾水哉館を開き、町人教育に意を注いだ。町人階層にも理解し易い題材として猿蟹合戦を選び、それを道徳教育の一環として利用したという可能性は、否定できないと思われる。

次に、画の検討を試みたい。画面下方では、鉄が蟹の前に跪き、臼、栗、鍼などの従者は蟹の後方に従っている。ただ、賛文に示されている従者のうち、牛糞は描かれていない。蟹や従者たちの頭部はそれぞれの本来の姿で、体軀は人間同様に描いている。その表情や仕草はユーモラスである。着衣の衣文線などには、澱みのないきびきびとした描線が用いられ、おのおのの姿態を的確に捉えている。鉄は左上の対岸の島を指差し、蟹は鉄状の手を頭上で傾けて、その島を遠望する様子である。これは、江戸時代における猿蟹合戦の中には、蟹が猿島さるがしまに猿退治にゆくという設定のものが多いことによると思われる。また、蟹の腰には袋が見え、その中には、従者たちに与えた黍団子が入っていると思われる。島には柔らかな形態の山岳が見られ、その山肌には披麻皴を用いるなど南画風の表現が見られる。また、蟹や従者のいずれもが、中国風の戎衣に身を包むのは、やはり、賛文が『春秋左氏伝』の文体に倣って著されていることに因んでいると考えるのが妥当であろう。南画風の猿島の表現とも相俟って、猿蟹合戦の一面面を、中国古代春秋時代の出来事に見立てたような雰囲気をよく醸し出している。

ところで、本作品は、画と賛が別紙であるため、両者が同時期に制作されたか否かは問題とならう。もちろん、画は賛に因むものであると考えられるので、賛が画に先行して著されたものと推測できる。しかし、画と賛の制作

時期にずれがあるとは考え難い。賛文は紙面全体を埋めており、これを独立した書幅と見なした場合、極めて窮屈な印象を与える。また、印章が賛文中程の余白に捺されていることも、書幅と見なした場合異例である。これは賛文が、その下方に画が配されることを予想して著されたためと思われる。おそらく本図は、賛文の著者中井履軒の指示を受けながら、あるいは賛文の内容を確認しながら、岩崎象外が描いたものであろう。

履軒本「解師伐袁図」は、猿蟹合戦を『春秋左氏伝』の文体で著すという履軒の奇趣に富む賛文に即して、象外の画がその趣意をよく伝える作品であると言えよう。

二 解師伐袁図の流布

「解師伐袁図賛」を伴う絵画作品を解師伐袁図と称するならば、その類例は履軒本以外にも散見される。この項では、履軒本以外の解師伐袁図を紹介し、「解師伐袁図賛」が、絵画作品に即して、いかに流布していったかについて考えてみたい。

まず、注目されるのは、先にあげた皆川淇園筆の「猿島復讐図」である。本図には天明七年の年紀があることから、履軒本同様極めて早い時期に制作された解師伐袁図であると判断できる。

本図と履軒本を比較すると、画面下方に蟹とその従者、水を隔てて左上に猿島を配するという画面構成、蟹と従者の配列、従者のうち缺、臼、鉞の姿態が類似することから、両者は、共通する粉本から制作されたか、一方が一方を粉本として制作されたものと推測される。また、淇園本には、履軒本には描かれていない牛糞が描かれており、「解師伐袁図賛」に登場する従者が完備していることから、より賛文に忠実な描写となっていることがわかる。た

だ、例えば履軒本の缺の要^{かなる}や臼の上辺の孔を眼として表しているのに、淇園本ではそれが見られないことなど、写し崩れと判断できるような描写も散見される。画から両者のいずれが先行するかを推測することは、意見の分かれるところであろう。ただ、「解師伐袁図賛」が、履軒壮年期という極めて早い時期から流布していたことを、本作品の存在から、確認することはできる。

一方、大阪大学附属図書館懷徳堂文庫は、履軒本以外に二点の解師伐袁図を所蔵している。うち一点は、賛文、画とも履軒本に極めて類似した作品である(図3)。但しこれは画、賛とも輪郭の内側を白抜きにし、外側を墨で塗り潰して拓本風に表している。

画は、猿島の山容などに若干の差異はあるが、基本的な画面構成、蟹や従者の姿態などは酷似する。また賛文は、字配りは異なるものの、個々の字形はやはり酷似し、末尾には、履軒本に捺されている「華胥國王之爾」印を表している。これらの点から、本図は、履軒本を模写したものであることがわかる。

画面の向かって左側には、別紙を継ぎ足し、履軒の兄竹山の子で、晩年父竹山から懷徳堂の学校預り人の地位を受け継いだ中井蕉園の文を、やはり拓本風に表している。

解子伐袁經傳各一篇簡悉雄偉非秦漢已後之文矣而尾有爾章曰華胥國王矣由是考之則華胥國史之逸耳宜裁與人間文字霄壤懸隔也

履軒本がいつ頃から懷徳堂に伝来したかは定かでないが、竹山や蕉園らがこれを目にする機会、制作当初からあったと想像される。そして、蕉園が、「華胥國王」は履軒であることを認識していなかった筈はない。「解師伐袁

「図賛」を名文と称賛するこの一文は、中井蕉園、ひいては彼の時期の懐徳堂において、「解師伐袁図賛」が尊重されてきたことを示している。

また、その下方には、白文字で「解子春秋經傳逡巡碑 華胥國後人黃裳隱者製」と書き込まれており、本図は履軒の曾孫で、懐徳堂が明治二年に閉鎖されたのち、懐徳堂遺物の管理や懐徳堂の評価に尽力した中井天生（黄裳）の手になるものと判断できる。本図が履軒の曾孫中井天生によって制作されたものであるならば、解師伐袁図は、それ以降も懐徳堂において尊重され続けたと推察される。

懐徳堂文庫に所蔵されている今一幅の作品は、幕末に大坂で活躍した絵師玉手棠洲の筆になるものである⁽⁹⁾（図4）。画面下方には、淡墨の没骨描を主に、所々濃墨でアクセントを付けて、一匹の蟹を描いている。これを見る限り「蟹図」と称するのが適切な作品であるが、画面の上部には、「解師伐袁図賛」が記されている。その字配り、字形は、ともに懐徳堂本に酷似し、懐徳堂本に捺されている印章も朱で丁寧に描き写している。また、画の向かって左には、「履軒先生猿島復讐戯文 棠洲玉手蓮模并寫（朱文方印「棠洲」）（白文方印「玉蓮之印」）」と記されている。履軒本の賛文と字配り、字形が類似すること、款記に「模」という文字が見られることから、本図は、履軒本の賛文を臨模し、その下方に蟹を描き添えたものと思われる。

棠洲は、懐徳堂で中井竹山から詩文を学んだ画人である中井藍江の弟子で、自らも懐徳堂に出入りしていたようである⁽¹⁰⁾。このような縁故から、棠洲は、懐徳堂において履軒本を実見し、その賛文を臨模したものと思われる。棠洲が、この臨模を自らの画作に応用したか否かは不明であるが、「解師伐袁図賛」に興味をそそられ、あるいはやはり履軒本を尊重する気持ちから臨模したものと思われる。

以上の二作品は、懷徳堂の關係者が履軒本を模写したものであるが、上田公長筆、篠崎小竹賛「解師伐袁図」⁽¹¹⁾（大阪市立美術館、図5）は、履軒本とは異なった趣を持つ作品として注目される。

画は、傍らに溪流がある山道で、蟹が栗に黍団子を与えるところを描く。その横には鋏が鍼を杖にして立ち、やや離れて曰が稜線の向こうから半身を覗かせている。画面右上には、「解師伐袁図賛」を書写し、「右履軒幽人戯製」と記した後、次の文を補う。

君子曰詩曰母教孫升木其袁侯之謂乎恃其輕捷以逞凶虐宜其赤族而為同姓所嗤于後也解介同宗其祖葛盧善解牛鳴牛異之為之用有以夫播麻大石亦能為君復仇豈麻石之苗裔乎

上田公長は、四条派系の画人で、大坂で活躍する一方、紀州藩の御用絵師も勤めた。一方篠崎小竹は、江戸後期大坂における漢学者サークルとして著名な混沌詩社の有力メンバーであった篠崎三島の門人で、後養子となった。十九世紀前半の大坂を代表する儒者である。この両者に交遊があったことは、既に小菅長次郎氏によって指摘されている。⁽¹²⁾

この作品に描かれている蟹は、明らかに日本風の衣を着し、腰には松葉を二本、大小刀のように差している。栗は、毬を頭とし、葉を衣のように纏っている。賛文に即してことさら中国風に描かれた履軒本とは異なり、日本の昔噺である猿蟹合戦を描く意図が窺える。また、小竹の補賛も、麻石を忠臣蔵の播磨・赤穂の大石内蔵助の祖に見立てるなど、「解師伐袁図賛」に自らの解釈を交えたものである。本図は、履軒本とは異なる画風を持ち、異なる学系の儒者が賛を著したもので、「解師伐袁図賛」に触発されながら、履軒本とは異なる趣致を示す作品といえる。

淇園本および本図の存在は、解師伐袁図が、懷徳堂関係者以外によってもしばしば制作され、しかも様々なヴァリエーションを備えたものが存在していたのではないかと想像させる。

一方、「解師伐袁図賛」の影響を受けたと思われる著作をいくつか目にする事ができる。これに關してまず注目されるのは、「解子復讐記一瓢菴図賛」が巷間流布していたことを推測することができる。これに關してまず注目されるのは、「解子復讐記一瓢菴記」（竜野市立歴史文化資料館）である。これは、中井履軒著の「解子復讐記」、皆川淇園著の「一瓢菴記」のそれぞれに、住吉靈松寺の僧で徂徠学派の儒者としても著名な義端勇進と、その弟子と思われる泉州堺の僧模島桂静が補注を加え、桂静が両者の内容を別に著した文をそれぞれに添えたものである。このうち「解子復讐記」は、「解師伐袁図賛」と同文である。義端、桂静の補注は、「解師伐袁図賛」の文体が、『春秋左氏伝』と比較した場合、不備なところが多く、文意も散漫であるとして、個々の字句を指摘しながら厳しく論難するものである。また桂静が「詭話春秋」と題する一文を別に著したのは、履軒の文の不備を正すためとしている⁽¹³⁾。本書は、履軒に対して極めて批判的な内容のものであるが、このような書が著されること自体、「解師伐袁図賛」の広まりと、その影響の大きさを示すものといえよう。

ところで、本書のうち桂静が撰した「評解子復讐記序」によると、中井履軒が「頃有携其所著解子復讐篇来而示予」したことが著作の契機となったという。このことから、履軒自身が「解師伐袁図賛」を他の人々に回覧させていたことは確かであろう。

次に、注目されるのは、「中井履軒戯編」の署名がある『昔々春秋⁽¹⁴⁾』である。これは、「解師伐袁図賛」と同じように、昔嘶を『春秋左氏伝』の文体で著したものである。ただ、「解師伐袁図賛」が猿蟹合戦のストーリーの一部

をとり上げるのみであるのに対し、本書では、桃太郎をストーリーの中心に据え、その展開に猿蟹合戦、浦島太郎、かちかち山などの昔噺のストーリーを絡めている。『春秋』が、中国春秋時代の列国の複雑な関係の歴史を、編年体で記述しているように、『昔々春秋』は、様々な昔噺のストーリーを絡ませ、それを編年体で整理している。

ただ、これは、履軒の著書ではなく、偽書であると考えられている。⁽¹⁵⁾ 著者として履軒の名を上げるのは、これを版行した人々が、「解師伐袁図賛」を目にし、昔噺を『春秋左氏伝』の文体で著すという発想に妙味を感じ、これを盗用したためであろう。また、履軒が『昔々春秋』を著しても不思議ではないという認識が世間にないと、わざわざ著者として履軒の名をあげる意味は薄い。履軒著として出版されたのは、履軒が昔噺を『春秋左氏伝』の文体で著した文、即ち「解師伐袁図賛」の存在が、一般にある程度知られていたためと推察されよう。

「解師伐袁図賛」は、成立当初から懷徳堂において尊重され、また徐々に世に流布していったものと思われる。そして、これに影響を受けたと考えられる著作が存在することは、その本来の用途として、猿蟹合戦を主題とする絵画作品に、これを着賛することが、しばしば試みられたことを想像させる。

三 画人岩崎象外について

履軒本「解師伐袁図」の筆者とされる岩崎象外については、すでに山中浩之氏によって、伝歴の概略が紹介されている。⁽¹⁶⁾ また、近世大坂を代表する歌人で、懷徳堂の有力門人としても知られる加藤景範（号竹里^{たかきよ}）の伝歴に関する多治比郁夫氏の研究の中から、象外の事蹟を知ることができる。⁽¹⁷⁾ 本項では、これら諸先学の研究を参照しながら、これまでに知り得た象外の伝歴を紹介し、その画風について検討を試みたい。

まず、象外の画歴を検証する手掛かりとなるのは、寛政二年版『浪華郷友録』である。その画家の項には「崑崎尚之 象外 象外閑人」という記載が見られ、象外は、当時大坂の有力画人の一人であったと推測される。⁽¹⁸⁾そして、「尚之」あるいは「象外」という名を有していたことを知ることが出来る。

一方、履軒の『幣帚統編』⁽¹⁹⁾の中には、象外の伝歴の概要を知ることが出来る一文が存在する。

象外畫像贊

先王教於郷。有六行。曰孝友睦婣任恤。象外翁於此數者。畧無所闕。可謂郷之善人也。性愛酒好畫。而煙霞之疾。則入于膏肓矣。壯歲勤於業。以阜財。老而傳於子。乃攜瓢載筆。探名山勝境者六載而沒。君子曰。善終焉。凡翁之子孫。其可以不師焉哉。嗟郷之人。雖非子孫者。師之亦可。

この一文は、象外の肖像画に対する履軒の贊文である。しかも「六載而没」とあることから、象外の遺像に対するものであることがわかる。象外は、寛政二年版の『浪華郷友録』に採録されていることから、この時点における生存が確認でき、また『幣帚統編』は、享和三年（一八〇三）七月の履軒の自序を有することから、その没年は、この間であったことがわかる。

冒頭の「先王」とは誰を指すのであろうか。「華胥国王」と称した履軒が言う先王とは、その父で懷徳堂二代目学主の中井登庵、もしくは竹山・履軒兄弟の師で懷徳堂で教鞭をとった五井蘭洲を指すと考えるのが妥当であろう。⁽²⁰⁾象外は、懷徳堂の教育に接した人物であったと推測できる。そして、壮年以前は経済的に成功して財を成したこと、酒と画、そして特に旅（「煙霞之疾」）を愛し、生業を子に譲った晩年は、専らその趣味に生きたこと、隠居後六年

で没したことなどを知ることができる。あくまでも、非職業的に画作をおこなった人物であったと推察される。

『幣帚統編』には、象外に関して以下のような文も収められている。

書象外怪軸後

象外喜畫恠精。夫怪何曾有象。然比比氣韻生動。若親遭而貌者。豈能求於象之外。以爲象邪。將貌其所嘗夢也。象外今年大夢既覺矣。今其在幽都。將貌人間世邪。幽都觀者。亦猶吾觀此卷也。

この一文は、おそらく象外筆の画巻の後跋として執筆されたものであろう。象外は、怪なるものを描くことを得意とし、この世に象かたものない怪なるものを描くのに、夢で見たものを描いたという。履軒は儒者として鬼神の存在を認めない立場でありながら、怪なるものを描いた象外の画が「氣韻生動」していると称賛する。これは『歴代名画記』の「論画六法」以来、中国の画論にしばしば見受けられる「形似」（象）の外にある「氣韻」を重視する思想を念頭に置いたものと思われる。と同時に、「象外」という号の由来を示すものと考えることができるかもしれない。

いずれにせよ、『幣帚統編』に収められるこの二文は、象外と履軒の密接な関係を推測させる。また、山中氏が紹介された「菊堂宛履軒書状」（大阪大学附属図書館徳堂文庫）も、象外と履軒の関係を裏付けるものである。⁽²¹⁾

一方、多治比郁夫氏の「加藤景範年譜」から、象外の事蹟を拾い上げると、次の通りとなる。

明和三年（一七六六）三月 四国旅行に赴く加藤景範に送別の歌を贈る（大阪府立中之島図書館蔵『加藤竹里

文集』）。

明和七年（一七七〇）冬 加藤景範著の『かはしまものかたり』の挿図五図を描く。本書は、中井履軒の序、

竹山の跋を添えて、翌年懷徳堂藏版として出版された（『かはしまものかたり』）。

安永三年（一七七四）三月 五井蘭洲十三回忌に際し、門弟たちが詩歌会を催し、象外は和歌一首を詠む（大

阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵『蘭洲十三回忌辰追悼和歌并詩』）。

安永六年（一七七七）八月 中井竹山・履軒兄弟、加藤景範、早野仰斎、蔀関月を招き舟遊びを催す（『加藤

竹里文集』）。

安永九年（一七八〇）夏 中井竹山・履軒兄弟、加藤景範とともに琵琶湖一巡の旅に出る（大阪府立中之島

図書館蔵「環湖帖」序ならびに後跋）。

天明八年（一七八八）夏 安永九年の琵琶湖旅行以後、旅先の風景を描く。これに中井竹山・履軒兄弟が漢

詩、加藤景範が和歌を添えて「環湖帖」ができる（同右）。

以下の事蹟から窺えるのは、象外は、中井履軒のみならず、その兄で懷徳堂四代学主を務めた竹山、懷徳堂教授の早野仰斎、そして加藤景範など懷徳堂で中枢の地位を占める人々と親密な交遊があったことである。また、当時の大坂画壇を代表する画人で、懷徳堂に寄宿していた蔀関月との親交も指摘できる。先に「象外畫像賛」から、象外が懷徳堂の教育に接した人物だったのでないかと推測したが、これらの事蹟は、それを裏付ける。

象外と懷徳堂のつながりを端的に示すのは、『かはしまものかたり』の挿図の制作である。この書は、山城国葛野郡川島村の孝子義兵衛の行状を、加藤景範が和文で綴ったものである。川島村には竹山・履軒兄弟のそれぞれの妻の実家革嶋家があり、義兵衛は革嶋家の傭人であった。義兵衛は、赤貧の中で、養母に様々な孝養を尽くしていたが、これを竹山が見出し、義兵衛を援助するため募金活動をおこない、領主の鷹司家や御所から顕彰されるよう運動した。当時懷徳堂では、社会教化の方法の一つとして、孝子を顕彰する運動を盛んにおこなっており、義兵衛の場合もその一環をなすものであった。ところが、当時の庶民教化に大きな力を有していた心学の側でも、義兵衛の行状に関心が寄せられ、明和七年五月、心学者布施松翁は『西岡孝子義兵衛行状聞書』を出版し、義兵衛を讃えたと推測される。懷徳堂にとって極めて大きな意義を有する版行に、象外が参画していたことは、彼が懷徳堂の中樞に近い人物であったことを窺わせる。

『かはしまものかたり』には五図の挿図が収められている。義兵衛の孝行の行状(図6)や顕彰を受けるため役所に出頭する義兵衛(図7)などを描いている。画は人物をはじめとする諸モチーフを簡略な筆致で表す。各人の表情は概して穏やかで、諧謔味もあり、親しみ易いものに仕上がっている。なお、義兵衛が役所に出頭するところを表した図中には、「崑尚之」の款記と「梅阜」と読める印を表しており、象外が「梅阜」という号を有していたことを推察させる。

象外の今一つの画蹟としては、「環湖帖」(大阪府立中之島図書館)があげられる。これは、琵琶湖周辺の名勝を十一図描いたもので、そのそれぞれに中井竹山・履軒の漢詩、加藤景範の和歌のいずれかを添える。前後には、

履軒の「琵琶清音」の題字と序文、景範の後跋を加え、折本形式の帖装に仕立てている。序文および後跋から、安永九年夏、「菊堂主人」と称される象外が、竹山、履軒、景範とともに琵琶湖一巡の旅をした後制作したものであることがわかる。

画に着目すると、岩や樹木など個々のモチーフは、真摯な描写態度で表現され、その形態の把握も的確である。描線にはスピード感があり、象外は、非職業画人としては優れた技量を有していたことがわかる。緑青、朱などの岩絵具を、薄く刷く彩色も快い。

ところで、中井履軒は、この序文の中で、以下のように述べている。

……抑畫家有和夏二宗象外翁所攻和畫也今觀此卷也宛然夏畫矣隳明而適于元何也盖得意於目而發趣于筆筆法無所拘則駸々乎逼眞不覺入于夏豈畫法自有和夏而山水元無和夏邪亦可以見天地之性矣

履軒は、最初和画を専門としていた象外が、この作品において「夏（華）画」を試みたとしている。「夏画」とは江戸後期における中国画風を意味する唐画を指すと思われるが、その範疇に含まれるのは、主に中国文人画風に依拠する南画であり、これに明清の写生画風などを加えたものであった。象外は、この作品を制作した時期に、唐画と見なされる筆法を自らの画風に包摂していったものと推察される。

実際、本作品の諸モチーフの表現に着目すると、例えば山岳に披麻皴風の描写を用いるなど、南画的な色合いが強い。殊に「比良嶽図」（図8）の米点風の山岳表現は、池大雅の「児島湾真景図」（個人蔵）などとの類似が指摘

できる。

また、画は全て、旅先の実景を描いたもので、真景図と称し得るものである。さほど著名でない名勝を描いた図も散見され、旅先の実景をスケッチした上で制作した可能性が大きい。中でも「園城寺図」（図9）は、近景の園城寺を中心とする大津市街から湖水を隔てて東対岸の山々にかけて、俯角を徐々に浅くし、合理的な視覚形成を図っている。

池大雅は、旅を愛し、旅先の実景を描いた真景図を何点か遺しているが、象外も「象外畫像賛」から窺えるように旅を愛し、「環湖帖」において旅先の実景を描いた真景図を制作した。また、真景図に合理的な視覚を導入することは、大雅が既に「朝熊山真景図」（個人蔵）で試みている。

このように、「環湖帖」の画風、真景図への取り組みには、池大雅との共通点が指摘できるが、これが大雅の影響によるものか否かは早急に判断できない。ただ、象外の活躍した十八世紀後期は、大雅の高弟の福原五岳や、やはり大雅の弟子で上方南画のパトロン的存在であった木村兼葭堂らが絵画活動を始め、大坂に大雅の画風が広まり始めた時期であった。象外と五岳、兼葭堂などとの交遊は確認できないが、彼らの活動に象外が刺激された可能性は否定できない。殊に、象外と深い交遊があった中井竹山・履軒、加藤景範らは、五岳、兼葭堂とも交遊があった。⁽²⁴⁾象外が、これら懐徳堂関係者を媒介として大雅の画風に接していた可能性は十分に想像されよう。

大雅の影響の有無は別にしても、五岳や兼葭堂と同世代であったと思われる象外は、大坂において最も早く南画制作を試みた画人であった。大坂における漢学的一大拠点であった懐徳堂が、象外に当時の流行の中国趣味を植えつけたことが、彼の南画制作の背景にあったことは、否定できないであろう。象外が「環湖帖」で示した南画画風

は、履軒本の猿島の山水表現にも見られる。象外の南画面風の形成、制作の場の提供に懷徳堂が果たした役割は大きかったと思われ、その意味で彼は「懷徳堂の画人」⁽²⁶⁾と称されるべき人物であった。

む す び

懷徳堂が、単に学問の場としての活動に停まることなく、大坂における文化育成の場としての機能を有していたことは、中井竹山と混沌詩社のメンバーたちとの詩文の交流や、加藤景範の和歌制作などからも明らかであろう。大坂画壇の活動に関しても、懷徳堂関係の儒者たちが、様々な画家たちの作品に着賛したり、⁽²⁶⁾蒔閑月、中井藍江など懷徳堂を制作拠点の一つとした画人が確認できるなど、その役割は決して小さなものではない。

履軒本「解師伐袁図」は、中井履軒の賛文に、「懷徳堂の画人」岩崎象外が画を添えたもので、懷徳堂という場が生み出した作品であると言えることができる。しかも、その賛文に触発されて、例えば上田公長筆、篠崎小竹賛「解師伐袁図」が制作されたように、江戸後期の大坂画壇に懷徳堂が与えた影響を具体的に示す作例として貴重である。

注

- (1) 猿蟹合戦の絵本もいくつか版行され、中でも赤本の西村重長画『さるかに合戦』（版行年不明）、黄表紙の曲亭馬琴著、北尾重政画『増補彌猴蟹合戦』（寛政十年刊）などが著名である。
- (2) 紙本墨画。二〇四・〇×五八・五厘。画と賛は別紙で、画部分は九二・七×五八・五厘。
- (3) 本稿における中井竹山・履軒の伝歴、懷徳堂の教学などに関する記述は、主に次の文献を参照した。

- 小堀一正・山中浩之・加地伸行・井上明大『叢書・日本の思想家 二四 中井竹山・中井履軒』（明德社 昭和五五年）。
- (4) 『日本画大成 第九卷 南宗派(一)』（東方書院 昭和六年）第一六三図。なお、本図の所在については現在確認していない。
- (5) 履軒本の制作年代の下限は、第三項で示した画の筆者象外の没年、すなわち享和三年以前と判断される。
- (6) 本稿における『幣帛統編』の引用は、『日本儒林叢書 第九卷 統編三 随筆部(2) 詩文部』（鳳出版 昭和五三年）による。
- (7) 『角川古語大辞典第二卷』（角川書店 昭和五九年）七三六頁「猿島」の項。
- (8) 一二三・八×六一・二糶。
- (9) 紙本墨画。一三五・一×五八・七糶。
- (10) 棠洲筆「象図」（大阪大学附属図書館懷徳堂文庫）には、幕末に懷徳堂教授として活躍した並河寒泉の着賛があり、棠洲と懷徳堂の交流を窺わせる。
- 武田恒夫「懷徳堂関係絵画遺品と大坂画壇」（『大阪大学共同研究論集』二「大阪の都市文化とその産業基盤」 昭和六一年）二九～三〇頁参照。
- (11) 絹本着色。四八・七×六六・五糶。
- (12) 小菅長次郎『上田公長正伝』（私家版 昭和五四年）。
- (13) 義端、桂静は、淇園の「一瓢菴記」に対しても、激しい文章批判を行っている。
- なお、本書は、奥書により天保三年（一八三二）五月四日、「正尊」あるいは「廉」という名を持つ人物によって書写されたものであることがわかる。書写者自身も補注を加え、義端、桂静の履軒や淇園に対する非難の中には、当を得ないものが多いことを指摘し、補注ならびに奥書において、彼らに対して執拗な非難を繰り返す義端、桂静をたしなめている。
- (14) 青藜閣・名山閣梓。版行年は不明。

(15) 「懷徳堂水哉館遺書遺物目録」〔懷徳〕一七号 昭和一四年)三三頁、「一三二 履軒先生解師伐衰圖贊」。

なお、新田大作氏は、『昔々春秋』を履軒著とし、その特質を検証されている(『昔々春秋』と中井履軒)〔実践女子大学文学部紀要〕一七号 昭和五〇年)。しかし、履軒は、著書に自らの名を記すことを好まず、「履軒幽人」などとの世に存在しない人物として署名することがほとんどである。「中井履軒戯編」というあからさまな署名からは、履軒の著作と考え難い。また『図書絵目録』は本書の成立を明和七年とするが、偽書ならばこれも偽わしい。

(16) 山中浩之「資料報告 中井竹山・履軒書簡」〔懷徳〕五八号 平成二年)八七頁。

なお同氏は、履軒の和歌集『越吟』に「きさと」という人物が見えることを指摘し、これが「象外」の和訓であろうと推測されている。ただ、その当否は確認し得ず、本稿では「しょうがい」と音読することとしたい。

(17) 多治比郁夫「加藤景範年譜」(『大阪府立図書館紀要』第八号 昭和四七年)。

(18) 上田氏注3前掲書六一頁、および武田氏注10前掲論文二九〜三〇頁参照。

(19) 注6参照。

(20) 『蘭洲十三回忌辰追悼和歌并詩』(大阪大学附属図書館懷徳堂文庫)は、蘭洲の十三回忌に、門弟たちが詠んだ詩や和歌を集めたものであるが、その中に象外の和歌が収められていることから、象外が蘭洲の教えを受けていたことは確かであろう。

(21) 注3上田氏前掲書に収められる「懷徳堂同志・門人・交友一覧」七三頁では、履軒の弟子岩崎数馬(万斯、繩武)を「画家象外のことか」と記しているが、その当否は不明である。

なお、象外が「菊堂」という号を有していたことに関しては、注24参照。

(22) 中井履軒の序文が、「琵琶清音序」と題されて、『幣帯統編』に収められていることは、山中氏が注16前掲論文の中で紹介されている。また、多治比氏は注17前掲論文において、加藤景範の後跋が『加藤竹里文集』(大阪府立中之島図書館)に収められていると指摘されている。

(23) 履軒の序文の中では「菊堂主人象外翁」、景範の後跋の中では「菊堂のあるしなる象外のおきな」と記されており、象外が「菊堂」という号を有していたことがわかる。これは既に山中氏が注16前掲論文で指摘されている。

なお「環湖帖」十一図のうち最後の「長命寺図」には、朱文連印「象外」が捺されている(図10)。

(24) 福原五岳筆「洞庭湖図」屏風(大阪市立博物館)には、安永四年(一七七五)、大坂の著名な文人十四人の着賛がおこなわれているが、その中には、竹山や三宅春楼、早野仰斎など懐徳堂関係者の賛も混じっている。また、『蒹葭堂

日記』には、竹山、履軒、景範の名が散見され、彼らと蒹葭堂の間に交遊があったことがわかる。

(25) 懐徳堂に一時居住した菴閑月や、その弟子で中井竹山から詩文を学んだ中井藍江は、懐徳堂と関係の深い画人と言えるが、寛政二年版『浪華郷友録』で象外は、この両者に挟まれて採録されている。『浪華郷友録』は、同流派同系列の画人を列挙することから、この三人を懐徳堂に関係するということ、同系の画人として並べたと想像される。

(26) 武田恒夫「懐徳堂と画壇の交流」(『大阪大学共同研究論集』一「大阪の都市文化とその産業基盤」昭和六〇年)および武田氏注10前掲論文。

執筆に際しては、肥塚隆、奥平俊六先生の御指導、懐徳堂友の会事務局竹越礼子氏の御助言を賜った。また、作品および資料の調査に際して御高配を賜った大阪市立美術館朝賀浩氏、大阪府立中之島図書館、竜野市立歴史文化資料館、本学附属図書館の各位に深謝する次第である。

(大学院後期課程学生)



图2 解師伐袁图（履軒本）部分

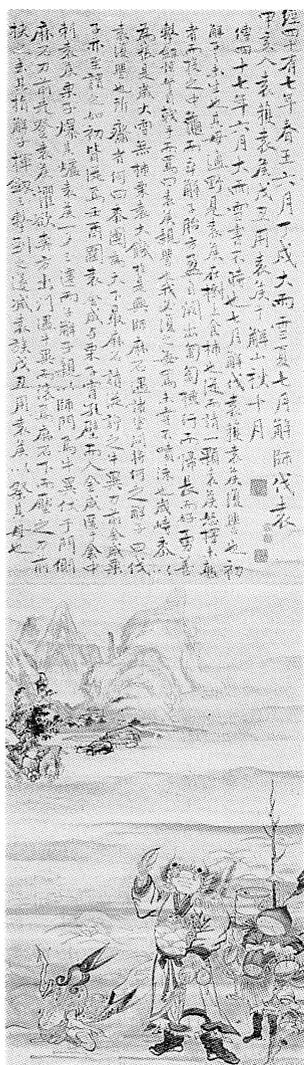


图1 中井履軒贊 岩崎象外画
解師伐袁图 大阪大学附
属図書館懷徳堂文庫

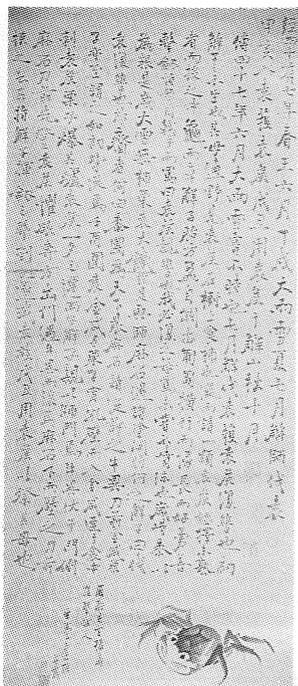


图4 玉手棠洲筆 解師伐袁図
大阪大学附属図書館懷徳堂文庫

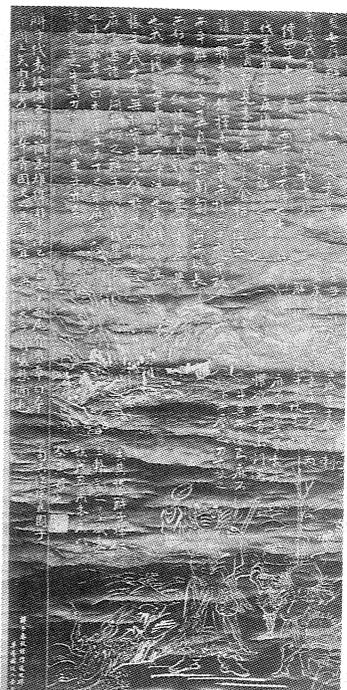


图3 解師伐袁図 大阪大学附
属図書館懷徳堂文庫



图5 篠崎小竹賛 上田公長画 解師伐袁図 大阪市立美術館

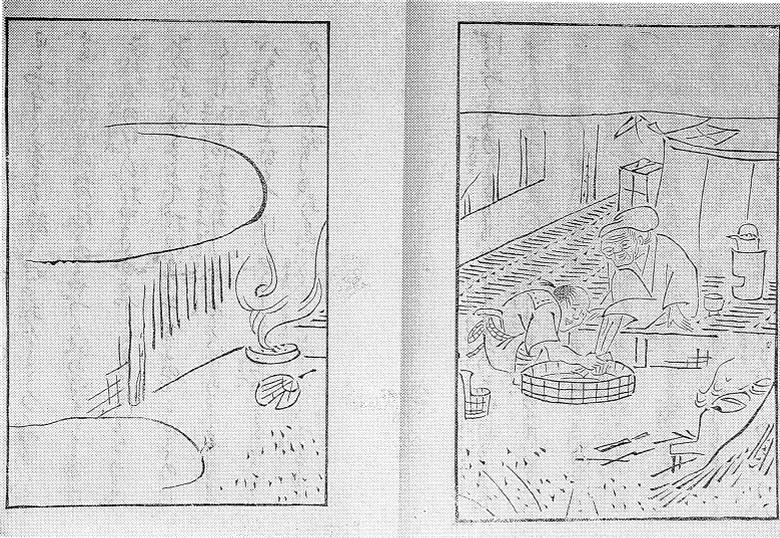


図6 かはしまものかたり 挿図 義兵衛の孝行
大阪大学附属図書館懐徳堂文庫

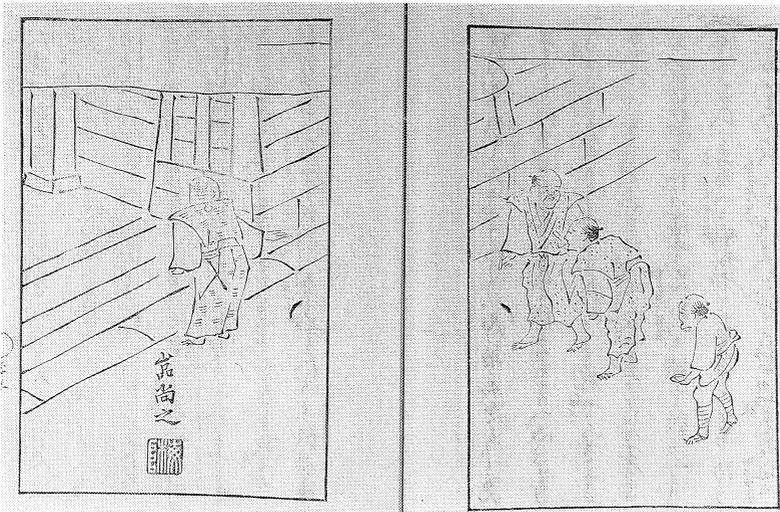


図7 かはしまものかたり 挿図 役所に出頭する義兵衛
大阪大学附属図書館懐徳堂文庫

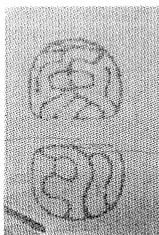


图10 環湖帖
「象外」印
大阪府立中之島図書館



图8 環湖帖 比良嶽图 部分
大阪府立中之島図書館

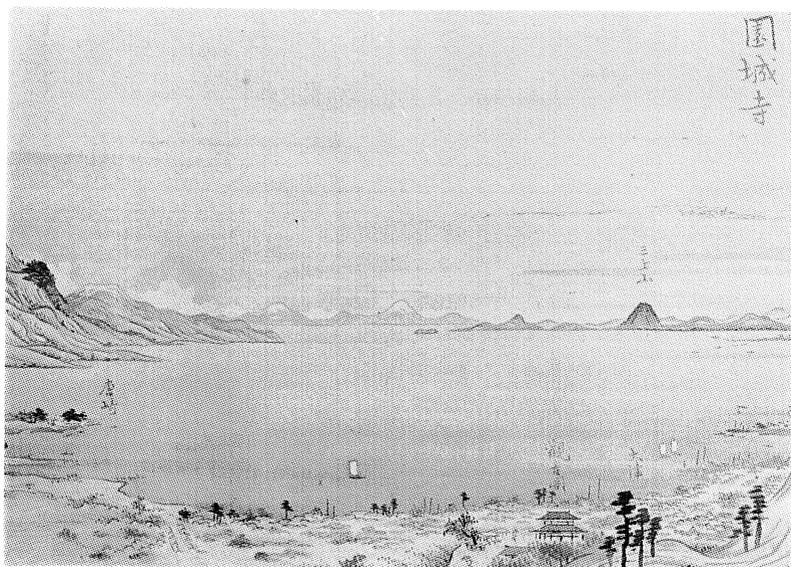


图9 環湖帖 園城寺图 大阪府立中之島図書館